



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田
信の白浜だより(その14)

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その14). うみひろ 2011, 88: 20-21

ISSUE DATE:

2011-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180236>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その14)】

マガキガイの生態

マガキガイの風貌は、毒のあるイモガイに似て美しい。2005年6月初旬に襲った台風4号による荒波の影響で、この貝が多数、瀬戸臨海実験所の北浜に打ち上がった。砂利に混じって次々と打ち上がる個体は、どれもすっかり弱りきっており、ラボに持ち帰って水槽に収容したが、多くの個体が数日ほどで死んでしまった。

マガキガイは、鎌のようになった蓋を持っており、また、素早い蹴りができる強力な足がある。奄美大島では、ジャンプする貝という“トビンニヤ”と呼んでいる。じっとしている時は、砂の中に、体を半分、あるいは全部を埋めているが、深くは潜らない。だが、台風ではそのようなツメ足も、潜る習性も、全く歯が立たなかったようだ。

マガキガイには2個の目玉が長い柄の先に丸くついている。優れた感覚器に加え、運動性に富んだ足があり、敵から逃避する能力も大いに発揮している。一方、ゾウの鼻のような吻を長く伸ばし、砂粒の間の微小な藻や有機物断片などを食べている。

マガキガイは紀南地方では『ツメバイ』の名前でよく知られている。ゆでて食べるとおいしく、酒のつまみとして重宝される。マガキガイは、白浜では繁殖期の6～8月頃、集団で浅瀬にやって来て、雄と雌が交尾行動をする。しかし、最近は、その数が減少してきている。だから、産卵にきた貝を採りやすいからといって乱獲すると、子孫が激減してしまうことになる。地元の人も、十分、気を付けてほしい。

マガキガイの貝殻の付着生物

マガキガイへのフジツボ類の付着については、多数の打ち上げ個体を調べた結果は、頻度も個体数も多くはないことが分かった。一方、付着しているフジツボ類の種は、いずれもサンカクフジツボばかりで、マガキガイ1個体に1～数十個体まで付着していた(図)。マガキガイの貝殻にはふだん付着生物が付いてないことが多いが、打ち上げの生きたマガキガイには、様々な海藻が付着しているものが発見された(図)。ウミウチワなどの海藻が付いた個体は、春に波が高い時に打ち上げられることがある。驚いたことに、台風直後、33cmほどの高さがある生きた緑色のナガミルが付着していた。ナガミルが付着した生きたマガキガイは、たった2個体だけではあったが、ナガミルは数mにも伸びる、その名の通

りの長大な緑藻だ。マガキガイにとっては移動の際に抵抗が大きくなって、ナガミルの成長につれてどんどん迷惑な存在になってゆくだろう。ナガミルは、マガキガイ貝殻上で数回分枝し、貝殻の長さとは比べると7倍ほどの長さとなっている。このような状態で、マガキガイは、これまでよくぞ死なずに、また、天敵にも捕食されなかったものだ。だが、長くなっていくことで、案外、天敵に食われることを免れ続けてきたのかもしれない。災い転じて福となった例だとしたら面白い。



マガキガイとその仲間の地理的分布

マガキガイは、わが国では白浜より北の房総半島以南から沖縄方面まで広く分布する。この仲間には熱帯海域に普通に見られるクモガイなどがおり、紀伊半島が分布の北限の種が多い。瀬戸臨海実験所北浜でのこれらソデボラ科の打ち上げは2属11種・亜種を記録しているが、そのうちの半分の6種、トンボソデガイ、ミツユビガイ、フトスジムカシタモト、マイノソデガイ、クモガイ、スイジガイがみな北限種である。

図 サンカクフジツボと海藻が貝殻上に付着した生きたマガキガイ